

歌と欲望のシンフォギ ア

葉っぱの妖怪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは欲望に手を伸ばし続けた一人の男とそれを支えた歌姫たちの物語。

※戦姫絶唱シンフォギア×仮面ライダーオーズのクロスオーバー作品。毎回の如く連載にはあるけど続くかどうかはモチベ次第

目次

ライブと欲望と三枚のメダル	1
覚醒と歌と謎の男	7
タトバと迷いと銀色のノイズ	12

ライブと欲望と三枚のメダル

俺が目にするそこは、地獄と言っても過言ではなかった。

鮮やかな夕日をバックに最高の歌姫たちが歌い、観客のテンションが跳ね上がるそれは素晴らしいコンサートステージになっている。

——はずだった。

それがステージは崩れ、床は砕け、観客席は崩壊し、人間だった“モノ”が風にさらわれ宙を舞う、人ひとりいない地獄と化していた。

いや、俺を含めて4人がギリギリながらも生きていた。

俺と一緒に来ていた幼馴染の立花響、そして今回のコンサートの主役であるアイドルユニットツヴァイウィングの天羽奏、風鳴翼の二人である。だがその彼女たちはその姿を歌っていた時の衣装から変わっていた。それぞれのトレードカラーを主体にしたインナーを身に纏い、その上に装甲を装着し槍と刀という得物を手にしていた。だが、崩落した瓦礫の下敷きになって身動きが取れずにいた俺や観客席の崩落に巻き込まれ転落した幼馴染を庇いながら戦い、ボロボロとなっていた。

特に天羽奏はノイズから響を庇い各種装甲が砕け、肩で息をしているほどの消耗であ

る。響も砕けた槍の一部が胸を貫き出血と衝撃で意識がもうろうとしていた。

それを見た奏さんは砕けた槍を掲げ、歌う。儂くも美しい、絶唱と呼ばれる命の歌を……

歌い終わると会場全体をエネルギー波が包み、ノイズを一掃する。

原作通りなら、絶唱のバックファイアを受け奏さんが倒れ、翼さんの腕に抱えられて響と翼の目の前で炭化し息絶える。はずであったが

「なんだ……あのノイズは……？」

一体だけ、銀色に輝くイレギュラーなノイズが生き残っていた。

奏さんは絶唱使用直後で戦闘不能、響は自力で動ける状況ではない。唯一動ける翼さんだが、戦闘の疲労と絶唱を受けてもなお無傷であったそのノイズに啞然とし明らかに動きが鈍い。

その隙をついてかなのかは知らないがノイズが倒れた奏さんへと突進する。一步遅れて翼が助けに駆け出すが明らかに間に合わない。

それを見ていた俺は明らかかな原作乖離に呆然としていた。今日のツヴァイウイングコンサートでノイズの大量発生は前世での知識で知っていたし、それによる響の重傷も、奏さんの……死も。俺はそれは仕方がないと思っていた。だがいざその状況を目の当たりにした俺は咄嗟に手を伸ばした。無意識のうちに伸ばしたその手は無論届

くはずなどない。

それでも・・・！

転生した時に俺は神様なんかにあったりしていない。女神さまとかにもあつたことなんてない。無論よくあるチート能力なんか持ちえていない。体にムチ打って身を投げ打って庇つたとしてもアレと道ずれに出来るとは限らない。

だとしてもこの手を伸ばしたい。無駄だと分かっている、不可能だと知っている、奏さんを、響を助けたいというこの欲望は！この手を伸ばし続ける願いだと知ってるから！

——そして俺は、赤く輝く光を握りしめて叫んだ

「変身ツツツ!!!」

「……んあ？」

眼前に広がる白い物体、そして甘い匂い。眠りから目を覚ました俺がそれが会長がよく作るケーキの食いかげだと認識するのにそんなに時間はかからなかった。

「よく眠れましたか？」

両腕を枕にして寝ていた俺の頭上から会長秘書の里中さんから声がかけられる。

まだちよつとぼーつとする頭を無理やり動かし時計を見る。時刻はもうすぐ6時を過ぎようとしていた。

寝てたのかと両腕を伸ばし意識を完全に覚醒させる。里中さんをよく見るとバツクを肩にかけ帰る準備を終えていた。

「定時になりましたので一応起こしておこうかと」

「うーん、俺はサボってたからその分の仕事してからあがるわ。ありがとね」

「はい、お疲れ様です」

部屋から出て行った里中さんを見送ったあと俺は立ち上がり、先ほどまで見ていたあの時の夢を思い出す。なんでまたあの時の夢を・・・と考えてるとテーブルに置いてある仕事道具のノートパソコンのとあるソフトが呼び出しコールを鳴らす。

それを聞いてノートパソコンにつないであるヘッドホンを耳に当てマウスを動かしくリックする。

すると画面にこの街のマップが表示されとあるポイントにいくつかのマーカーが重ねられる。白が2、赤が複数・・・白は民間人、赤はノイズの反応を示している。

白二つは赤いマーカーに追われるように動いたのち立ち止まり赤に囲まれる。たしかその場所は工業地帯で高台に位置しており常人では逃げ場がない場所である。つまりは・・・追い詰められたということになる。

「間に合うか・・・ん？」

と白の片方が青に変色していく。青はアフヴァツヘン波形の反応を示している。「と、いうことは・・・」

俺はついに原作通りに事が動き出したこと、そして響が GANG ニールに目覚めたことを認識した。

「あれは予知夢類とでも言うのかね・・・」

ふっと笑いながら俺はノートパソコンをシャツトダウンし、残りのケーキを素早く冷蔵庫にしまおうと机の上に置かれた赤、黄色、緑の三枚のメダルを手に部屋を出ていく。
2年前のコンサートと同じように、守るために

立花響の幼馴染にして転生者、陽野 映司として

覚醒と歌と謎の男

翼さんの新作CDを求めてリディアンから飛び出したはずの私はノイズから逃げていた。

近くにいた女の子の手を引っ張り走って走って、転んでもあの人の言葉が私を諦めずに立ち上がらせる。

さらに走って走って走りまくって・・・
それでもノイズはしつこく追ってくる。

一体どれだけは知ったのだろうか。無我夢中で逃げ続け何かの施設に逃げ込んだ私たちは大量のノイズに追い詰められていた。

「死んじやうの・・・?!」

女の子が私の服に顔をうずめて泣きじゃくる。

じりじりと距離を詰めてくるノイズ。そんな時、とても優しく力強い歌を口ずさんでいたあの人の、奏さんの言葉が再び私の脳裏に浮かび上がってくる。

私にできること・・・できることがきつとあるはず・・・だから!!

「生きるのを諦めないで!!」

奏さんの言葉が私の口を震わせた。その時、私の胸に歌が思い浮かぶ。聞いたことのない不思議な歌。

「Balwisyall nescell gungnir tron」

——私はその歌を、迷いなく歌った。

訳がわからなかった。姿が変わったと思ったらすごいジャンプできちやうし、着地の時衝撃は来たけどほとんど痛くなかったし、体は軽くて何でもできちやいそうで、実際ノイズを倒せて戦えると思ってても体は急に重くなるし、数が多くて庇いながらだと下手に動けない。

そんな私にノイズが迫ってくる。

その時、ノイズを次々と吹き飛ばしながら一台のバイクが突っ込んできた。

見たことある青い髪をなびかせて私の横をすり抜けながらノイズにバイクをぶつけたその人は綺麗にそばに着地した。

「呆けない！あなたはその子を守りなさい」

「翼さん……？」

そのまま翼さんはノイズの群れに向かって走り出した。

「Imyuteus amenohabakiriron」

歌を歌った翼さんが光に包まれ、私のと似たような姿へと変わりノイズの群れを吹き飛ばした。

次々とノイズを斬っていくその戦いぶりに見とれていた私は群れから離れたところにいた銀色のノイズに気が付いた。ノイズの群れをすべて倒した翼さんもそれに気が付いたらしくそのノイズを見つめる。

心なしかその顔はさっきのノイズと戦っているときとはまた違う感じがした。と銀色のノイズが動いた。

他のノイズと同じように体を翼さんへと突撃させるが動きはほかのより遅い。それをなんなく回避した翼さんが隙について他のノイズを斬るときと同じように斬りつけるが、銀色の体に少し刺さる程度で斬ることはできない。

「くっ……！」

苦虫を潰した顔で翼さんがもう一度剣を再びノイズの体へつき立てるが、やはり刺さりはしても倒しきれない。とノイズが起き上がり、翼さんへ攻撃を仕掛ける。それを剣

で避けつつ攻撃を仕掛けるがやっぱり倒しきれない。

先のノイズを簡単にやっつけたときと違って苦戦している翼さんに私は集中しすぎて後ろから迫る別の銀色のノイズに気が付かなかった。

「あー！」

女の子の声で気づくも遅く、すでに避けられないと思った私はとっさに女の子を抱き寄せノイズに背を向ける形で自分の体を楯にした。これなら女の子だけは守れる。そう思った。

その時、パキンツという聞いたことのない音とすぐ後ろで軽い爆発のようなものが起きた。

顔を上げるとノイズが体から煙を吹かしながら私を飛び越えて吹っ飛んでいく。振り返ると黒いバイクに乗った人がこっちに銃のようなものを向けながら走ってきて、私のすぐそばで止まった。

黒いヘルメットを着けて顔はわからないその人はバイクから降りると私たちに向いてこう言った

「よく頑張った。あとは俺に任せろ」

男の声だった。ヘルメットでよくはわからなかったけど、確かに男の人が私たちを励ますように言った。

「さて、いくか・・・！」

その人は懐から何かバツクル（だったと思う）を当てるとベルトが伸び体に巻きついたりということ。そして、赤と黄色と緑のメダル3枚をセットし叫んだ。

「変身!!」

電子音がベルトから流れ、空中に赤・黄・緑の光が彼を包み込んだ。次の瞬間、彼の体は変わっていた。

へタカ！トラ！バツター！タ・ト・バ！タトバタトバ!!

タトバと迷いと銀色のノイズ

〈タ・ト・バ！タトバタトバ!!〉

いつも聞いてて思う変な歌と共に変身した俺は軽くジャンプしつつ手首を慣らし試作型セルバスター（仮）で吹っ飛ばしたノイズへファイティングポーズを決める。

セルノイズと呼称しているその銀色のノイズは通常型のノイズよりもシンフォギアの利きがそんなに良くない。まったく利かないわけじゃないけども、シンフォギアですこし時間がかかる。唯一の救いといえれば一度の出現する数が1体か2体程度ということと動きがそんなに良くないということ。

普通のノイズみたいに体をみよーんと伸ばして高速で突撃つてのが出来なくて、どこか人間くさい動きをするヤミーのようだ。

「オーズ……」

二課から伝えられたのか翼ちゃんがいつものようにこつちを向いて睨みつける。それも今回は失われた……って言うのとは違うけどもガングニールが見つかったことでその顔も数割増しで怖くなった。

まあ、敵対していない以上あつちはノイズに集中するだろうしこつちは響たちを守る

ことに集中しよう。

とセルノイズが動いた。腕と思われる機関を俺に向けながら走ってくる。

「どらっしやあー!!」

それを俺は正面から殴り飛ばす。よろめいたところにジャンピングニー、トラクローを展開し斬る、斬る、斬る。

トドメにバツタの力で高く飛び上がり勢い付けてトラクローで粉碎する。セルノイズは何もできずに爆発四散!

後ろで響がほえーつと呆けるような声を出すのを聞きながら、ふうーつと息を吐きながらふと翼ちゃんの様子を見る。下から切り上げて何とか腕を斬り飛ばしたいまいち剣にキレがない。無駄に大振りで斬ったり、いつもなら食らわれないような攻撃を受けてる。

「……さすがに見てらんねえな」

俺はバツタメダルを黄色のチーターと入れ替え再びスキャンする。

〈タカ!トラ!チーター!〉

「姿が……変わった……?」

足がバツタの力を有したのからチーターへと変化したと同時にその力を使い翼ちゃんに攻撃しようとするセルノイズに高速で肉薄し殴り飛ばす。

「剣が迷い過ぎだ。さすがに助太刀するぞ」

「くっ……感謝はしよう」

一瞬、睨みつけたがすぐに一応の感謝を述べセルノイズに向き合う。その手に持った剣の刃が巨大化し青いエネルギーが集まる。それに合わせて再度オースキヤナーでメダルをスキヤン、その力を一時的に開放する

『スキヤニングチャージ!!』

赤、黄、黄の順番でエネルギーリングが展開されノイズを目標にとらえる。翼ちゃんが剣にたまったエネルギーを斬撃として飛ばすと同時にチーターの力で高速でリングをくぐり肉薄、トラクローにエネルギーを集中させる。

「はああああああ!!!!」

「セツイ、ヤアアアアアアア!!!!」

【蒼の一閃】

蒼の一閃の着弾に合わせてトラクローをノイズへたたき込み粉碎させる。俺、翼ちゃんはお互い肩で息しながら技を放った状態から立ち上がり、見つめる。先に変身を解除したのは翼ちゃん。今回はあなたなんかには構ってられませんとでも言いたいかのように響を見つめる。それを見て俺はバイクへと歩きながら変身を解除、元の黒いライダースーツとヘルメットの如何にも不審者っぽい状態へと戻る。いまだに呆ける響た

ちを通りバイクに跨る。

ハツと俺に振り返った響は何か言いたそうにしているが二課のN I N J Aこと緒川さんに出会おうと再びドキッ！忍者との地獄鬼ごっこ〜正体ポロリを添えて〜が始まりそうになるのでそのまま走り出した。

そのまま夜遅かったために直帰した俺は鴻上会長にテレビ電話で報告した。いつもなら里中さんが俺の代わりに会長に報告してくれるんだが今日は既に帰宅済み。つてことで俺が自ら伝えることになった。

「なるほどガングニールは無事覚醒したか・・・」

報告を終えると会長はグラスにそそがれたワインをぐいっつと口に飲み込んだ。グラスから口を話すと手ぶらになって立ち上がり、俺に背を向けて会長室の窓から外を眺め

る。

「ご苦労だった。今日は休んでくれ」

「ありがとうございます。それでは」

「映司君」

テレビ電話を切ろうとしていた俺を会長が止めた。そのまま俺を画面越しに見つめている。「いや、なんでもない」と言つて視線を外した。

失礼しますと声をかけて回線を切る。会長の目つてなんでも見透かしてくるようがちよつと苦手なんだが……。

「はあ……」

いや、たぶんだけど全部お見通しなんだろう。その上であえて触れないでくれているんだろう。俺が悩みの末欲望が小さくなつてること。

翼ちゃんの事言えないな……

そういつて俺はベットに潜り込んだ。

「やつべ、食い残しのケーキ忘れてた」

戦いに行く前に残っていたケーキをすっかり忘れていたことを思い出したのは次の朝だった